吉田城さんを偲んで

小　倉　孝　誠　Kosei OGURA

吉田城さんに初めて会ったのは、すでに20年以上も前のことになる。私が留学中の、パリ高等師範学校の中庭だったように記憶している。その後、日本に帰国してからは、共同研究に誘っていただいたり、研究誌 *Equinoxe* のフローベール特集号の責任編集を任されたり、京大で集中講義をする機会を与えてもらったりした。また春・秋の仏文学会の折には、顔を合わせて親しく話したことが一再ならずあった。しかし吉田さんとは世代が少し違うし、住んでいる町も異なるので頻繁に会っていたわけではない。またプルースト研究者たちのように、研究をつうじての親密な交流があったというわけでもない。そういう私が吉田さんの追悼文を草するのに適任かどうか分からないが、尊敬していた先輩の早すぎる死を衷心より悼みつつ、とりとめのない思い出を綴ることを許していただきたい。

昨年6月、吉田さんの訃報を知った時はとても驚き、なかば信じがたい気がした。春先から体調を崩して入院しているが、しだいに快方に向かっていると仄聞していたからである。6月26日の夕刻、吉田さんの通夜に参列した際にも、その死が現実の出来事としてなかなか納得できなかった。祭壇に飾られていた吉田さんのにこやかな遺影が、いまだに強く記憶に残っている。おしゃれで、ダンディで、陽気な吉田さんにいかにもふさわしい写真だった……。

最後にお会いしたのは、2004年秋に北海道大学で開催された仏文学会の折である。この大会から学会の行事として「ワークショップ」が始まったのだが、吉田さんはそのひとつ「文学と身体」のコーディネーターを務めてくれたのだった。当時の幹事長として、一定のテーマをめぐってパネリストと聴衆が活発で率直な意見交換をおこなう、知的な交流の場としてワークショップを立案した私は、その年の初夏に、文学における身体表象をめぐるワークショップを企画していただけないか、と吉田さんに依頼したのだった。その頃吉田さんを代表者として、「フランス文学における身体」という科研費共同研究が進められていたし、身体のテーマが吉田さんにとって大きな関心事であることを知っていたからである。多忙にもかかわらず、吉田さんは快諾してくれたのだった。

私自身、別のワークショップのコーディネーター役だったので、「文学と身体」の議論を聴けなかったのが残念だった。刺激的なワークショップで、大い

に盛り上がったと人づてに聞いた。いずれにしても総じてこの試み自体はなかなか評判が良く、現在も続いている。休憩時間に顔を合わせた時、「小倉さん、幹事長ですか、ご苦労さま。今回のワークショップ、なかなか面白い企画ですね」と言われ、「ワークショップを引き受けていただき、ありがとうございました。おかげさまで軌道に乗りそうです」と、短い言葉を遣り取りしたことを覚えている。幹事長として役員会や総会に臨まなければならず、吉田さんとゆっくり話せなかったことが今では悔やまれる。

しかし、話は発端から始めるべきだろう。

吉田さんの名前を初めて耳にしたのは、私が京大に在学していた学部四回生の時である。大学院入試を京大と東大の両方で受験し、京大を不合格になり、東大に合格した私は四年住んだ京都の町を離れ、東京に転居することになった。卒業式も間近に迫ったある日のこと、当時仏文科の主任教授だった本城格先生の研究室に挨拶にうかがった。先生はいつものように穏やかで静かな口調で、およそ以下のようにおっしゃられた。「まあ、東京で頑張りなさい。君のように京大の院入試に落ちて東大に行った吉田城君という、プルーストをやってる優秀な学生がいますよ。今は留学しているようですが。吉田君は京大の院入試で、日本語で答える問題にフランス語で解答を書いたんだ。内容は正しかったけど、やはり丸はつけられなかった。東大の大学院には合格すると思っていたしね」。日本語で答える問題にフランス語で解答を書いてしまった、ある意味では粗忽な学生。しかし、フランス語をほとんど書けなかった当時の私から見れば、設問の趣旨に反するとはいえフランス語で書いた、書けたということ自体が、すでに十分衝撃的だった。世の中にはスゴイ学生がいるものだ、と妙に感心したのである。

吉田さんの顔を初めて見たのは、1978年の秋だったと思う。見た、とはいっても、こちらが一方的に「ああ、あの人が噂の吉田さんか」という状況である。大学院一年生で、K先生のマラルメに関する講義に出ていたのだが、ある日、見知らぬ人が教室の片隅に座っていた。仏文科の先輩だろうというのは、察しがついた。秋になると、フランスに留学していた人たちが帰国して、大学院の講義にちらほら姿を見せるようになるからである。K先生は少し驚いたようすで、「あ、吉田君、いつ帰ってきたの？」と声を掛けたように記憶している。ああ、あれが噂の……。

今はどうか知らないが、当時東大の仏文研究室では院生の名簿が作成され、学生に配布されていた。そこには博士、修士課程の学生の氏名、入学年度、研

究領域（だいたいは作家名）、そして住所が記してあった。「個人情報保護」に敏感な現在なら問題になるところかもしれないが、当時は当然のことのように、何かあった時すぐに連絡が取れるようにと研究室の助手が作成したものだろう。住所がフランス国になっていれば、それは当人が留学中という意味だった。しかも私費や、育英会奨学金で割と容易に留学できる現在と違って、当時フランスに留学するというのは多くの場合、コンクールに合格したうえでフランス政府給費留学生として渡仏するということだった。

大学院に入ったばかりの学生からすれば、給費留学生としてフランスに行くということは、すでにそれだけで十分立派で、敬意に値することだった。況して、吉田さんのように、プルーストの草稿を分析した優れた博士論文をソルボンヌに提出し、公開審査で高い評価を得て帰国した人となれば、それはもう雲の上の人。吉田さんがずば抜けた秀才で、立派な博論を書いたということは他の先生たちの口からも漏れ聞いていたのである。「あ、吉田君、いつ帰ってきたの？」とK先生が言った時、思わず視線を向けてしまったのはそういう理由からである。当時、吉田さんはまだ弱冠28歳だった。多くの学生がこれから給費留学生として渡仏しようという年齢で、吉田さんはすでに博論を完成し、日本に帰国していたのである。当時は言葉を交わす機会もなく、翌春、吉田さんは大阪大学に着任したはずで、その後、京大に転任した。

1983年秋、私はフランス政府給費留学生としてパリに渡った。住んだのはパンテオンの近く、ユルム通りにあるパリ高等師範学校の寄宿舎である。私より数年前に、吉田さんも住んだ場所だった。図書館長のP氏から、「あなたはパスカリアンか、それともプルースチアンか？」と訊かれ、どちらでもないと答えると、何だか意外な表情を示したのを思い出す。高等師範学校に寄宿した日本人学生には、パスカルやプルーストの研究者が多かったということである。その「プルースチアン」のなかに吉田さんが含まれていたことは、言うまでもない。

偶然にも、ソルボンヌにおける私の指導教官R教授は、かつての吉田さんの指導教官でもあった。初めての面談ということで、私は緊張しながらソルボンヌの研究室に赴き、自分がどういうことをやりたいか拙いフランス語で伝えた。R教授はこちらの話しを聞き、いくつか質問をしたうえで、最後に「ところで、あなたはヨシカワやヨシダを知っていますか」と言う。「ヨシカワ」とは、もちろん吉川一義氏のことである。R教授はさらに続けた。「彼らはまったく素晴らしい論文を書いた。フランス人も顔負けだ。日本のプルースチアンは本当に優秀だ」。

こんな次第で、私は吉田さんの噂をいろいろな所で、さまざまな人から聞かされていたのである。その吉田さんと初めて言葉を交わしたのは、冒頭にも述

べたように、高等師範学校の中庭だった。1985年の初春だったと記憶している。在外研修でやって来ていた吉田さんが、『失われた時を求めて』のプレイアッド新版のために仕事をしていた時期に当たる。日差しの柔らかいある日、今となっては思い出せないが、誰か共通の知人を介して吉田さんを紹介されたのである。「ああ、君が小倉君ですか」と吉田さんが言い、「初めまして、お噂はかねがね……」と私は答えた。「お噂はかねがね……」というのは、時には単なる社交辞令にすぎないが、この場合は文字どおりの意味だったことは、これまでの記述から理解してもらえるだろう。

その後、高等師範学校の図書館や、リシュリュー通りの国立図書館の草稿閲覧室で時々顔を合わせた。私はその頃、フローベールの『感情教育』の草稿を読み解く作業をしていたから、ときには草稿研究について話したことがあるのだが、細部はよく覚えていない。ただ、準備中のプレイアッド新版について楽しげに語る吉田さんの表情だけは、鮮やかに記憶に残っている。

仕事の合間に、ときには昼食やコーヒーをともにすることもあった。ある日、高等師範学校の食堂で食べようということになり、入り口に掲示してあるメニューを見ると牛タンだった。牛タンといっても、文字どおり牛の大きな舌を丸ごとローストしたものが皿に載って出されるのである。美味という人もいるが、私は食べられない。「小倉君、牛のベロ好きですか？」と吉田さんが訊く。「見ただけで胸がむかつきます」と私。すると吉田さんは「じゃ、外へ行こう」と笑い、二人で近くのカフェに向かったのも、今となっては懐かしい思い出である。

1987年に帰国し、やがて教師となってから、私は翻訳書や自分の本を出す度に吉田さんに一部送っていた。ほとんどいつも一番早く礼状をくださったのが、吉田さんである。そこにはお礼の言葉とともに、適切なコメントがかならず付してあった。また拙著『〈女らしさ〉はどう作られたのか』を1999年に上梓した際には、吉田さんから『日本読書新聞』に長い書評を寄せていただき、身に余る讃辞まで頂戴した。他方、吉田さんの方からも御著者や御翻訳を上梓する度にお送りいただいた。主著『「失われた時を求めて」草稿研究』をはじめとする、世界的なプルースト学者としての吉田さんの業績については、本追悼号において他に語ってくださる方がいるであろう。

個人的には、吉田さんの著作のなかでは『神経症者のいる文学』がとても好きで、大きな刺激を受けた。バルザックからフローベールを経て、プルーストに至るフランス近代小説を、神経症を手掛かりに読み解いてみせた著作である。文学のみならず、ジェリコーやムンクの絵画、シャルコーがサルペトリエール

病院で記録した図像資料まで分析した章も含むという、贅沢な本だ。病理の性質は違うものの、過酷な病と共生せざるをえなかった吉田さんにしてみれば、文学における病の表象を問いかけることには格別の意味があったはずである。私自身、死の危険がなかったとはいえ、15年ほど前にやはり病に倒れてひと月ほど入院生活を送ったことがあり、このテーマには無関心でありえない。そしておもに19世紀を研究している者として、フローベールやゾラの作品を見事に分析されてしまったことに脱帽せざるをえなかった。

ただ、19世紀文学における神経症のテーマを論じるのであれば、ゴンクール兄弟に関する章がほしいと感じた。彼らの小説の主人公たちはほとんど皆、神経や精神を病んでおり、その臨床医学的な表象こそまさしく、19世紀後半を特徴づける精神風土の一面を照らし出してくれるからである。著書を送っていただいた御礼の返信に、生意気にも私はそのようなことを仄めかした。後日、何かの雑談の折に「小倉さんの言うとおりかもしれない」と吉田さんは言っていた。そして数年後、科研費による共同研究「フランス文学における心と体の病理」の研究成果報告書に、吉田さんは「ゴンクール兄弟における病の心理学」と題する論考を掲載し、『ジェルミニー・ラセルトゥー』と『娼婦エリザ』を論じた。あの論考は『神経症者のいる文学』の補遺だったのではないか、と私は勝手に解釈している。

10年ほど前から、吉田さんには科研の共同研究に誘っていただいた。私は東京に住んでおり、さまざまな事情が重なって、研究分担者として名を連ねながら京大での研究会に欠席がちだったことには、忸怩たる想いが伴う。それでも二度発表の機会を与えてもらったし、それがきっかけとなって私自身、身体や病のテーマにたいする関心を深められたように思う。仲間に加えてもらった二つの共同研究は、それぞれ意義ある成果報告書となって結実した。とりわけ2005年3月に出た報告書「フランス文学における身体——その意識と表現」は、吉田さん自身の二篇の論考を含んで、まもなく京都大学学術出版会からあらためて刊行されることになっている。欣快の至りである。

偶然のことながら、本追悼号が出る頃には、『身体の文化史』という野心的で、いささか大仰なタイトルの拙著が刊行されているはずである。文化史、といっても19世紀フランス文学の話が多い。吉田さん自身が執着していたテーマをめぐる本、存命であればぜひ読んで、感想を聞かせていただきたかった本を、亡き吉田城さんの霊前に捧げたいと思う。

（おぐら・こうせい　慶應義塾大学教授）